

俳句ポスト地貌季語 春 令和七年

東日本 「しもつかれ」

あなた
貴女にはこれお見舞としもつかれ

林田 燿

平成十七年（二〇〇五）の初午は二月三日。北関東の栃木県を中心に東北や関東の一部で、初午の日に作る郷土料理に「しもつかれ」がある。気取らないのが郷土料理とはいえ、これはまことにぎつくばらん。土地のおいそのもの。早速、地貌季語に頂戴した。

節分に撒き残した炒り豆と正月の食べ残りの塩鮭の頭、それに地の大根や人参を竹製の下ろし器（鬼おろし）で摺り下ろす。初午のお稲荷さんに供えるので油揚げを入れ、酒粕を加え、焦げ付かせないように掻き混ぜて煮ること小一時間。酒や醤油や塩も少々入る。

初午の日に何軒もの「しもつかれ」を食べ歩くと中気にならないとか、一年無病息災だとか。かつて食べ歩きは、厳しい冬の暮らしでの相互扶助であったであろう。

「しもつかれ」の名称のいわれはわからない。栃木県なので「下野の餉」が縮まったものか。

掲句は、作者によると、ある年の初午に、絵描きで料理名人の友達がふるさとの手料理を食べさせてくれたという。思い出の句なのである。作者は東京都在住。

西日本「雛荒し」（ひなあらし）

どやどやと来て神妙に雛荒し

鈴木恵美子

子供が地域の家を廻る行事「粥釣」と「雛荒し」が、私はかねてから気になっている。前者は、一月十四日に子供たちが家を廻り「かいつとーせー」と声を掛け、粥箸を贈り、餅などを貰う、四国の高知県各地に残る小正月の行事。後者は雛祭の行事。その騒ぎ立てる文句が卑猥でおかしい。吉岡三平氏によると、岡山地域ではこんなことをいう（『岡山歳時記』日本文教出版、昭和四十一年七月刊）。子供が三、四人と連れ立ち、花嫁が来たばかりの家とか、女子が生まれた家に、初雛と称してご馳走を食べに行く。家の戸口で、「おひなアあ

らしにさんじった。チンポのさきアねじだいこ」とわめく。祝意を持った呪いの文句なのである。すると、家の中から「さあおあがり」と招かれる。子供たちは座敷に上がり白酒を飲み、赤飯や煮しめなどを食べ、さらに次の家に行く。

茨木和生氏が『季語の現場』（富士見書房、平成十七年一月刊）で「雛荒し」を取り上げられ、詳細に紹介されている。早くは山本健吉氏が『カラー図説日本大歳時記・春』（講談社、昭和五十七年二月刊）の「雛祭」の傍題に「雛荒し」を上げているが、茨木さんのいわれるように、あまり知られていないのがさみしい。

掲句は、子供の雛荒しの様子をメリハリある表現描いた端的な作。作者は岡山県出身。

出典

ゆたかなる季語	こまやかな日本	宮坂静生（岩波書店）
語りかける季語	ゆるやかな日本	宮坂静生（岩波書店）

俳句ポスト地貌季語 夏 令和七年

東日本 「朴葉飯」（ほおばめし）

朴葉飯顔を埋めて頬張れる

藤浦昭代

朴の葉の用途は広い。初夏の朴青葉にまるめ餅を包んだ朴葉巻（朴葉餅とも）は木曾の名物。すでに『語りかける季語 ゆるやかな日本』で紹介した。朴の葉に味噌を包む。あるいは乾かした朴落葉を皿として炭火の上で朴葉味噌を愉しむ。飛騨高山などのものが名高い。朴青葉にご飯を包むのが朴葉飯。北国の金沢、能登、富山、福井などの山村では五月から六月にかけて、田植の頃につくられる。採りたての朴葉を広げ、砂糖をまぶした黄粉きなこを敷く。その上に炊いたばかりの熱いご飯を置き、四方から畳むように包む。ご飯に黄粉がなじむ。朴の葉がもつ香気が、やさしい素朴な味を醸すかも。それに煮物を添えて、重箱に詰め、田植時の昼餉ひるげやこびる（小屋）に出す。畦あぜや堤に広げてみんなで食べる。この上ない幸せを感じたひとときであった。

朴葉飯は田植時ばかりでなく、初夏に客の接待用に用意されることも多い。

掲句は、朴葉飯のうまさをユーモラスに詠う。「ほおば」のくり返しがおかしい。作者は金沢市在。

西日本 「ひとつばたご」

黒潮にひとつばたごの山照らふ

小山舜輔

別名が「なんじゃもんじゃ」。モクセイ科の落葉高木で、高さは三十メートルにもなる。自生地として名高いのが対馬。島の北部の鰐浦わにうらではひと山がひとつばたごに覆われ、五月中旬には円錐花序えんすいをなす雪のような白く細い花が咲く。国の天然記念物に指定されている。ひとつばたご祭があるのもその頃である。

中国大陆、台湾、朝鮮半島に生えるが、日本では自生地が対馬のほか、愛知、岐阜、三重、長野に限られており、珍しい木なので、正体が判らないまま、「なんじゃこりゃ」という意

味の変な名が付いたらしい。明治神宮外苑の南西の隅、六道の辻には江戸十題から植えられており、通称が「六道木」ろくどうぼく。

「ひとつばたご」は尾張の本草学者水谷豊文ほうぶんが名付けたもの。「たご」はトネリコの方言。

トネリコが七枚の小葉をもつ複葉なのに対し、単葉のトネリコの意から「一葉たご」ひとつばと称した。

掲句の作者は対馬の人。黒潮の海照にひと山のひとつばたごが一斉に開く。わが郷土の美しい五月を讃えたのである。

出典

ゆたかなる季語	こまやかな日本	宮坂静生(岩波書店)
語りかける季語	ゆるやかな日本	宮坂静生(岩波書店)

俳句ポスト地貌季語 秋 令和七年

東日本 「継子の尻拭」(ままこのしりぬぐい)

身を孕む木曾のまま子の尻ぬぐひ

中島畦雨

幼子の虐待が日常の話題となるばかりか、実子まで平気で殺害する異常なことがしばしば起こっている。そんな現代に暮らしていると「継子の尻拭」くらいでは驚かないかもしれない。が、秋の植物名にしては残酷な名が付けられたものだ。

継子の尻拭はタデ科の蔓性の一年草。一メートル余りで山野や水辺に生える。細茎に棘が下向き、逆に付く。葉は三角であるが、葉裏や葉柄にも同様な棘がある。梅雨の頃から十月くらいまで淡紅色の米花が咲き、秋には短い穂状の実になる。

かつて紙は貴重なもので、継子には用達の後、紙を与えないで、草で尻を吹かせたので名が付いたもの。同じタデ科の蔓草に「秋の鰻掴み」がある。継子の尻拭と同じように茎や葉に棘があり、ぬるぬるした鰻を掴むにはもってこいだという。これもなんと即物的な名が付いたものか。

掲句は、土の匂いをする見事な地貌詠。秋早い木曾では継子の尻拭がいち早く実を孕んだという。擬人化が巧い。作者は木曾の入り口、塩尻市在住。

西日本 「ケベス祭」(ケベスさい)

ケベス舞う火に惚れられてふくら脛

河野輝暉

国東半島の火祭である。大分県国東市国見町櫛来の岩倉八幡社で、十月十四日の夜、「ケベス祭」がくりひろげられた。ケベスのいわれは語順を変えた説などのほか、諸説あるが、わからない。

「ケベス」役はひとり。地域の十の集落から毎年交代で選ばれる。潮搔きと称する七日間

の潔斎けっさいをして、麻の白装束に「ケベス面」を初めて付ける。面は鼻が潰つぶれ、目は段違いのペーソスに満ちた奇怪な面。神主の合図でケベスが社殿を下りると、境内の庭に積まれた枯れ羊齒しだに点火される。

御練り行列が火を回り始める。鉦かねや太鼓が鳴り、笛が吹かれる。突然、ケベスが火を目がけて突進し、それを阻もうとする白装束の「トウバ」（当场）と互いに棒で争う。この交互の突進・阻止の繰り返しに祭は昂揚こうようする。火祭の火の粉を浴びると無病息災の御利益があるとか。

掲句は、火に飛び込んだケベスの躍動のさまを描く。纏まといつく火を「火に惚れられて」とは面白い。作者は大分県国東市在住。

出典

語りかける季語	ゆるやかな日本	宮坂静生（岩波書店）
ゆたかなる季語	こまやかな日本	宮坂静生（岩波書店）

俳句ポスト地貌季語 冬 令和七年

東日本 「氣嵐」（けあらし）

昇る旭^ひを待つ氣嵐の船灯り

深谷雄大

冬の霧をいう。北海道の漁師が使い始めた方言が今では日本海沿岸の富山辺りまで使われている。気象学的には蒸気霧と呼び、冬の海面や川面に発生する。

夜間に冷え込みが厳しい朝、陸の寒気が海上に流れ出て海面の水蒸気を冷やしてできる濃い霧を呼んでいる。氷点下二十度ともなると気温と海水温度との差が大きくなり、釧路では弱い北東の風が吹く朝に発生しやすいという。

富山湾でも立山連峰から昇る朝日に海面の水蒸気が輝き幻想的な光景を見せ、冬の風物詩になっている。気温が上がると間もなく消えるが、氣嵐が立った日中は晴れるので、漁師は漁日和と歓迎する。

掲句は、濃い氣嵐が立ち籠める寒々とした日の出前の景を描く。停泊している船はみかん色の灯をともしている。地貌に根ざした珍しい光景だ。作者は旭川在住。

西日本 「寒緋桜」（かんひざくら）

寒緋桜岐路に立つ身の透きとおる

久手堅倫子^{くでけんりんこ}

真冬に咲く沖縄の桜である。鮮やかな花の色は桃の花よりも色濃く、臙脂色^{えんじ}。釣鐘状に下を向いて咲く。花は五弁。散り際に特徴があり、房ごと落ちる。

沖縄人がさくらといえば、これ。かつて「緋寒桜^{ひかんざくら}」と呼ばれていたが、本土の彼岸桜^{ひがんざくら}と呼称が間違えられるので、上掲のようになった由。沖縄本島の北では一月上旬に開きはじめて十日から二十日かかって徐々に咲き、満開は下旬。名護城址の桜まつりが一月というのもまことに南島である。南の石垣島では二月上旬が満開という。

『沖縄俳句歳時記』（沖縄俳句研究会編）には寒緋桜の傍題に「緋桜・島桜・寒桜」なども揚げられているが、熱海で見られる「寒桜」は寒緋桜と山桜の交配種で、花は淡紅色、一重咲きである。

「庭埋めし寒緋桜は一樹なり」（安次富順子）という句がある。私が先年、那覇の公園で

見た寒緋桜も見事に繁茂していた。山之口獺の詩碑があった。今でも鮮やかに桜と詩碑が目
に浮かぶ。

掲句は、寒緋桜の鮮やかな花に決断を迫られているようだ。身が透明になるとき、人は成
長する。作者は沖縄県出身。

出典

語りかける季語 ゆるやかな日本

宮坂静生（岩波書店）